

『天のふるさと』 ヨハネの黙示録21章3～4 2015.11.22(主日礼拝説教より)

『あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。』 ヨハネの福音書14章1～2節

◆この世の「終活」は、余命宣告、葬儀、お墓のこと等、体の心配ばかり…一番大事な魂の落ち着き先、永遠の安心の居場所についてはどうなのだろう？

◆聖書で天国は「天のふるさと(ヘブル 11:13～16)」と呼ばれる。「郷愁」とは、異郷の地にあつて故郷を懐かしむこと…同様に私たちは、この世にあつて、本能的に魂の故郷(自分がどこから来てどこへ帰るべきか)を求めているのでは？『ちりのもとあつた地に帰り、霊はこれを下さつた神に帰る(伝道 12:7)』。有名な良寛和尚は、晩年酷く体調を崩した時『いまよりは何にかたのむかたもなし。教えてたまえ後の世のこと』と詠んだ。釈迦も孔子も、死後の世界に明快な答なし…キリストは「あの世」について『わたしの父の家には住まいがたくさんある…あなたがたの場所を備え…迎えに来る(ヨハネ 14:2)』と話した。

◆『父の家』と呼ばれる天の故郷では、命を下さつた神様が、私たちの人生のあらゆる苦悩、悲しみを全て知り、涙を拭い、慰めてくださる(黙示録 21:3～4)。またそこでは、神ご自身が私たちを照らし、命の木が豊かに実り、その葉はあらゆる傷を癒し、完全な慰めと全き安息があるという(黙示録 22:1～5)。

◆誰がそこに入れるのか？日本人的には死ねば誰もが天国…と言いたい聖書はいう『…汚れた者…偽りを行う者は決して都に入れない。小羊のいのちの書に名が書いてあるものだけが入れられる(黙示録 21:27)』と。この世で聖なる神の前に堂々と立てる者等一人もない。しかしご安心を！天の故郷への道がただ一つ！父の家から世に降りて来られたイエス様(神の小羊…ヨハネ 1:29)が、世のすべての罪汚れの身代わりに死に、復活された！このイエス様を感謝して受け入れる時、すべての罪が赦され、天の小羊のいのちの書に名前が登録される！今日、イエス様を救い主として心に迎えた人は、この世でもすでに安息と癒しをいただき、慰めの中に生き、慰めの中で死を迎え、天国へ入る！